http://decfamily.p1.bindsite.jp/2014/

We 35R

No.363　14/05/16

トイレの難しさとゴミ問題の共通点

昨日、帰りがけに地元の本屋でカメラ雑誌などを立ち読みをしていたら、そばの棚から若いオトーサンと娘（３歳くらいか）の会話が聞こえてきた。

娘：わぁ、ちびまる子ちゃんだ。ちょっと覗いてみようっと！
父：●●、もう遅いから帰るよ。
娘：（無視して絵本を覗く）
父：さあ、早くぅ～。
娘：（まったく無視）
父：遅くなるとトロルがでるよ～～（脅す）
娘：（悲しそうな声で）いやだ～～
父：ね、なら早くお家に帰ろう。
娘：うん。
（本を置いて移動開始…かと思ったら）
娘：あっ、ドラえもんの本だ！

…と、結構笑える展開で、３歳くらいにしてはなかなかやるなぁと感心したのだが、よく見ると、これほど父（大人）を手玉にとるこのお嬢さんがオムツをはいているのである。

＊

「子育てをしたことのある人なら誰でも知っているが、子どものしつけで一番大変なのがトイレで用を足すことを教えることである。」とある本に書いてある。この本の著者は、同時に「いま文明国の多くがゴミ問題に悩まされており、ゴミの分別をしきりに市民に教育している。だがうまくいかない。」と指摘して、この２つには共通の背景があることを分析する。さて、トイレの難しさとゴミ捨ての難しさに共通する背景は一体何だと思う？　引用してみよう。

＊

生活していればゴミが出るし、生きていれば排泄物が出る。したがって定住生活者は、定期的な清掃、ゴミ捨て場やトイレの設置によって環境の汚染を防がなければならない。私たちはそうしたことを当たり前と思っている。そうじをしなければならないことも、ゴミをゴミ捨て場に捨てることも、トイレで用を足すことも。

しかし、定住革命の視点に立つなら、これらはすこしも当たり前ではない。遊動生活者は、ゴミや排泄物のゆくえにほとんど注意を払わない。理由は簡単だ。彼らはキャンプの移動によって、あらゆる種類の環境汚染をなかったことにできるからである。（中略）

数百万年も遊動生活を行ってきた人類にとって、（定住生活によって）そうじしたり、ゴミ捨て場をつくったり、決められた場所でのみ排便したりといった行動を身につけるのは容易ではなかったのではないか？

＊

遊動生活から定住生活への転換が人類の文明化に大きく影響したことになっているが、それにともなって現実には様々な課題があったに違いない。その課題を克服しようとした人類の苦労の名残が、例えばトイレやゴミ問題として残存しているというわけだ。

この本は『暇と退屈の倫理学』（國分功一郎、朝日新聞社）である…と書いてピンと来た人は立派。今度の『ちくま評論選』の考査範囲に、同じ本の別の部分を採録した部分が入っているからである（「「贅沢」のすすめ」）。上の引用と筆者の主張は別のところにあるのだが、この本もたいへん面白い本である。夏休みに向けて推薦しておきたい。